



先輩の作文と体験記

1 「教師になってやってみたいこと」

「教師になってやってみたいこと」

(家政学部被服学科 令和7年3月卒業)

教師になってやってみたいことは、たくさんあります。担任や部活動の顧問、学校行事など、自分が中高生だったころ、楽しいと思ったことを、今度は支える立場として生徒が良い学校生活を送れるようにサポートしていきたいと思っています。日々生徒の成長を近くで見守ることができると思うと、想像するだけでワクワクします。

特に私がやってみたい、やり遂げたいことは、生徒が自立した生活を送れるような家庭科の授業をすることです。家庭科は、受験科目に関係なく、中学校では技術科と合体した教科であり、家庭科を学ぶ意義がわからないと思っている生徒は多くいます。ボランティア先の中学校では、家庭科をなぜ学ばなければいけないのか感じている人がほとんどでした。現在ライフスタイルが多様化している背景から、生徒自身の人生ですから正解というものはないと思っています。だからこそ家庭科の授業では、生徒自身が選択し、より良い生活を送れるような、多くの選択肢を生徒に与えていきたいと思っています。例えば、被服実習では、トートバッグを作れるようにすることが必要なわけではありません。トートバッグを作る過程における、まつり縫いやボタンつけなどの細かな技術が、今後の生活で生きてくると思います。気に入りのジャケットのボタンが外れてしまった時、ボタン付けができれば、より長く着用し続けることができます。気に入った商品があったが裾が長く裾上げが必要な時、お金を払いお直しをしてもらうのも1つの方法ですが、自分でまつり縫いができれば、お金を払わずに、かつすぐに着ることができます。このような生活の選択肢を広げられるような授業を作っていきたいと思っています。そういった授業を考える上で、生徒が楽しいと思える授業にしたいと思っています。

また、生徒との関わりを大切にしていくこともやってみたい事の1つです。授業だけでなく、行事やホームルームや休み時間など少しの時間でも、生徒と会話ができる時間を大切にコミュニケーションを取りたいと思っています。

他にもまだまだやってみたいことはたくさんあります。憧れの先生を追いかけるだけでなく、私らしい“先生”を確立できるように、試行錯誤しながら頑張っていきたいと思っています。

「学び続けていく教師」

(家政学部児童学科児童教育専攻 平成22年3月卒業)

「小学校の先生になりたい！」

小学校の卒業文集に書いてから早10年、私は今、小学校の教壇に立っています。

4月から7月までの約4カ月間、クラスでは毎日色々なことが起き、1つ1つ丁寧に解決し、きめ細かい指導を胸に日々駆け抜けてきたつもりですが、振り返ってみると反省ばかりで、本当に子どもに申し訳ないと感じています。

それでも、『うちの子、先生のこと大好きって言っていますよ』と、やんちゃで普段から私に叱られてばかりの子ども保護者から言われたり、私が午後から出張で学校を出るときに『先生行ってらっしゃい！』と正門まで子どもたちが見送ってくれたり、『先生大好き！』と抱きついてくれるあの子たちを見たりすると、嬉しくて嬉しくて涙が出ます。

クラスで嬉しいことがあったときは一緒に笑い、喜びました。クラスで悲しいことがあったときは、一緒に泣きました。

どの子も自分の気持ちを素直に表現できていることが、本当に嬉しくて心地いいクラスだなと思います。

教師は子どもに悩まされ、子どもに救われる毎日なのだと日々感じています。

「先生」は子どもにとって、学校を卒業したあとも、何年、何十年たっても、ずっと「先生」です。子どもは「先生」から言われたさりげない一言を、いつまでも覚えているものです。それほど教師は子どもにとって大きな存在であり、影響を与える存在であります。だからこそ教師は「聖職者」とも呼ばれるのです。

私は学生時代、教師になる「までの」努力をしてきました。そうして教師になった今、私は教師になって「からの」努力として、日々精進していかなければならないと感じています。子どもの一生に影響を与える存在、「聖職者」とも呼ばれる教師は、学び続けていく人であってこそ、人にもものを教える権利を持っているのだと思います。

これからも、顔施・打座即刻の心で職務に励み、決して驕ることなく、常に子どもとともに学び続けていく教師でありたいです。

教師になって4ヶ月、やってみたいこと

(文学部英文学科 平成22年3月卒業)

教師になって4ヶ月が経ち、生徒の様子や学校の動きにも少しずつ慣れ、毎日忙しいながらも充実した毎日を送っています。

さて、「教師になってやってみたいこと」ですが、私は教師になる前から「楽しみながらできる授業」を理想として、それを実現したいと思っていました。しかし、現場に立ってみると簡単なことではなく、自然に楽しく身につけてもらいたいという意図で行うアクティビティーも面倒に思う生徒や、授業中に何度起こしても眠っている生徒、ノートもとらずただ机に座っている生徒など、私が目指している「楽しく生徒が意欲的に取り組む授業」という以前の問題で、生徒の授業への姿勢に悩まされていますが、一方で現状を実感できたと納得したという点もありました。

そこでこれから、この現状を踏まえて自分にはなにができるのか、どうすれば生徒が「もっと知りたい」と感じ、自発的に学ぶようになるのかということが、これからの私の「教師になってやってみたいこと」に繋がるのですが、それは、授業中はほどよい緊張感で、私が教室に入ってきたらすぐ授業をする態勢になったり、集中して授業を聞いたりとごく当たり前のことを生徒に身に付けてもらうことです。授業中、一言も話させないという厳しく息苦しい授業にするのでは意味がないと思います。そうではなく、生徒の「自発性」を引き出したいと思います。今の時点で私ができることはテンポよく授業をし、生徒の理解度を把握し、それに合わせた授業を展開することです。

とてもちっぽけなことだと思われてしまいますが、教師になる以前と教師になってからの「やってみたいこと」は大きく変わったと思います。全員が授業に集中しないのは仕方ないことだからと手を抜くことはいくらでもできると思います。しかし、授業を受けている生徒の50分間を無駄にしてはいけないという思いをいつまでも持っていきたいと思います。何年もキャリアを重ねれば、また「やってみたいこと」は変わってくると思いますが、これが教師になって4ヶ月の私のやってみたいことでもあり、目標でもあります。

「教師になってやってみたいこと」

(家政学部食物学科食物学専攻 令和7年3月卒業)

私は教師になって、想像力を相手にも自分にも働かせられる生徒を育てたいです。

そのために、①苦手なことも武器になることと②自分の意見をもつ方法の2点を伝えていきたいです。

①苦手なことも武器になる

大学では、授業の他に病院や特別支援学校へ実習に行きました。その中で、次の日の献立を楽しみにして明日も生きようと頑張る緩和ケア中の患者さんや、車いすで一生懸命学校に通う生徒など、明日をどうやって生きるか考え、毎日一生懸命に生きている人々を目の当たりにしました。そこで、今まで「どうせ無理」と挑戦してこなかったことに挑戦してみようと思えました。私は、人前で話すことも苦手ですし、勉強も運動も得意ではありません。ですが、

苦手なことがある＝生徒の悩みを理解できることだと思い教師を目指すことを決めました。教育実習を通して、生徒が毎日挨拶してくれたり、楽しそうに話してくれたり、たとえ授業が完璧でなくても生徒や先輩の先生方がサポートしてくださったり、挑戦してよかったと思えることばかりでした。このように、苦手なことも武器になるように、誰にでも必ず魅力があることを伝え、生徒が自信をもてるような言葉がけをしたいです。

②自分の意見をもつ方法

私が高校の教師を目指す理由の一つに進路指導があります。そこで生徒に自分の意見をもつ方法を伝えたいです。それは、人の話を真剣に聴くことです。自分の意見とは合わなくても、先生や外部講師、テレビ、YouTubeなど自分の身近な人の話をまずは聴くことです。そして、それに対して自分はこう思うと意見をもつ癖をつけると、ただぼーっと聴くだけとは大きな差になります。反対に、誰かが言語化した話に共感したらメモを残しておくことをおすすめします。そうすると、いつか自分の意見を言葉で表現しなければならないとき（面接や小論文など）に必ず役立つことを伝え、ものの見方を広げられるようにサポートしたいです。

以上のことを通して生徒の想像力を育て人生が豊かになるようにサポートしていきたいです。

「教師になってやってみたいこと」

（家政学部児童学科児童教育専攻 平成29年3月卒業）

私は子どもの可能性を引き出し、未来を生きる子どもたちの力になれる教師になりたいです。

なぜなら、私は小学校3年生まで友人関係が上手く築くことができず、何事にも消極的でした。そんな私に担任の先生が「あなたはみんなを引っ張っていける力を持っているのだから、もっと自分に自信を持ちなさい」と言って下さいました。自分自身が気づいていなかった新たな私の長所を見つけて下さった先生との出会い。私はこの先生との出会いのおかげで人生が大きく変わりました。この恩師との出会いにより、「私は将来教師になり、今度は私が子どもの可能性を引き出し、未来を生きる子どもたちの力になりたい」と思ったからです。

大学生活を通して、子どもの可能性を引き出すためには、どうしたら引き出せるのか常に考えながら学んできました。大学の授業やボランティアでは、多くの小学校に行き、たくさんの先生方や子どもたちと触れ合うことができました。そんな中で、素晴らしい先生の授業をみる機会を得ました。その先生の授業は、初めて見た時から子ども一人ひとりをきちんと理解されているのがとても伝わってくる授業でした。授業を受けている子どもは、どの子も一心に考え、のびのびと発言し積極的に学んでおり、45分の授業はとても短く感じるものでした。45分集中して学ぶことができるのは、教師がこの授業で一人ひとりに何を身につけさせたいかが明確に考えられているからだと思いました。そのため、授業が終わった後「どうしてあの場面でAくんを指したのですか？」と質問しても、その子の背景まで理解された返答が返ってきました。子どもに確かな学力をつけるためにも、誰に何を聞かれても理由が述べられる授業作りをすることで、子ども一人ひとりに合った授業をすることができるのだと改めて確信しました。子どもの新たな可能性を引き出してあげるためにも、教師は日頃からあらゆる場面で子どもとコミュニケーションをとり、児童の背景までも理解していくことがとても大切だと思います。

今の世の中の子どもたちは、未来が不透明であり、夢を持つことや目標を持ち突き進んでいく意欲が持ちづらい世の中になってきています。だからこそ私は、子ども一人ひとりと正面から向き合い、児童一人ひとりを理解し、6年間の中で多くの経験をさせ、その中で自分では気づいていない新たな可能性を引き出してあげたいです。教師は、1日の中で長い時間子どもと関わることができます。だからこそ、一人ひとりを知ることができ、新たな可能性を見つけ引き出してあげられるのだと思います。その子にとって出会った先生は、一生先生です。一人でも多くの子どもの可能性を引き出し、未来を生きる力になれる。そんな教師を目指したいです。

2〔教育実習〕

「教育実習を経験して」

(千葉県 市立中学校)

私は母校の中学校で、5月に家庭科の教育実習と9月に栄養教諭の教育実習をさせていただきました。

家庭科の教育実習では、家庭科の指導案を何度も書き直し、授業の教材作成や調理実習の材料購入、道徳の授業計画、生徒との交換ノートのようなもの、部活動指導、清掃指導、放課後のパトロール、実習録の記入など、やるべきことがたくさんあり大変でした。しかし、「生徒にこんなことを学んでほしい」や「生徒の学校生活をより豊かにするために何ができるだろう」ということを考えると何事にも懸命に取り組むことができました。

私は、実習で難しいと思うことがありました。その1つが話し方です。「もっと声の大きさやスピードにメリハリをつけなければ最も伝えたいことが分からなくなってしまう。」と指導していただき、注意して話したつもりではありましたが、簡単には改善することができませんでした。2つめに時間の使い方です。特に調理実習は時間が予定通りに進まないことが多く、臨機応変に対応する難しさを痛感しました。さらに、空き時間が全くない日、生徒との交換ノートのようなものの記入は休み時間で終わらせるべきだったのですが、終わらせることができず、生徒総会の時間を使わせていただいてしまいました。

このような私に対しても、先生方はとても温かく指導をしてくださいました。学級経営の指導をしてくださった先生は、放課後の時間を使って、実習初日から生徒一人一人について教えて下さり、他の日には教室の提示についてや今まで出会った先生方のお話など、とても多くのお話をしてくださいました。教科指導の先生は、午後から出張であっても夜7時ころに学校へ戻り指導をしてくださいました。また授業の参考にと、様々な資料を用意して下さいました。

先生方や生徒のおかげで、とても充実した実習になりました。いつか教員となり、実習で得たものを生かしていきたいと思います。

(家政学部食物学科食物学専攻 平成24年度教育実習)

『教育実習での経験』

(東京都 区立中学校・国語)

私は都内の公立中学校で教育実習を行いました。母校ではなかったので実習に行く前に教育目標や学校の概要に目を通すなど、実習校について調べることから始めました。

実習が始まるまでは不安がありましたが、始まると毎日新たな学びがあり、大変なことがありながらも楽しい日々を送ることができたと感じています。また、実習期間中に運動会があり、学校行事の運営についても学ぶことができました。

実習中主に行っていたことは、授業見学、授業準備・授業、朝と帰りのホームルーム、教室の清掃、担当クラスの連絡帳の確認・コメント記入、担当クラスの学級日誌の確認・コメント等です。また、コロナウイルス感染拡大を防ぐための体調チェックに参加させていただく日や、部活動の見学をさせていただくこともありました。

授業を行う中で難しいと感じたのは、クラスの雰囲気によって授業での発問の方法や作成した副教材の進め方を少しずつ変えることです。授業内容を変えてはいけませんが、積極的に発言があるクラス、自ら発言する生徒が少ないクラスなど、クラスの雰囲気は様々なので発問の投げかけ方などに工夫が必要でした。毎回授業後に先生からアドバイスを頂き、次第に感覚が掴めるようになっていきました。

授業作成以外の面では、授業を担当するクラスや毎日のホームルームを担当するクラスに限らず、出来るだけ多くの生徒を見ることが大切だと感じました。私の担当教科は国語ですが、初日に校長先生から「自分の担当授業だけで

はなく様々な教科の授業を見学すること、様々な部活動を見学することで新たな発見がある。」というお話があり、英語や社会、数学、理科、音楽などほとんどの教科の授業を見学しました。様々な授業を見学することで先生方の授業の構成や進め方のみならず、自分が授業で担当している生徒の他の授業での様子が分かり、自分の授業での接し方を見直すきっかけにもなりました。

実習初日から最終日まで、指導教員の先生方はもちろん他教科の先生方も親身になって指導してくださり、とても充実した日々を送ることができました。これから実際に教員として教壇に立つときも教育実習での経験を活かして励んでいきたいと思います。

(文学部日本文学科 令和4年度教育実習)

教育実習を終えて

(埼玉県 市立中学校・英語)

私は、母校の中学校で教育実習に参加させていただきました。三週間の実習は、大変有意義で充実したものとなりました。教科指導と学級指導の二つの視点から、実習について振り返りたいと思います。

教科指導については、主に三学年の外国語科の授業に入りました。第一週目は英語での自己紹介や部分指導を、第二週目から第三週目にかけては授業実習を行いました。また、第三週目には外国語科と特別の教科道德の研究授業を行いました。三学年は五クラス編成のため、外国語科の授業が数多く設定されていました。そのため、入る授業数も自ずと多くなり、とても勉強になりました。特に、クラスごとに学級の色があることを実感し、目の前の生徒の実態に合わせて指導をしていくことが大切だと改めて思いました。また、空き時間が一日につき一コマあったので、先生方をお願いをして、三学年の他教科と他学年の外国語科を中心に授業見学をさせていただきました。授業見学をすることで、外国語科の授業では見られなかった三学年の生徒の姿を知ることができてよかったです。加えて、同じ外国語科の授業でも、各学年の発達段階を踏まえて、扱う教材やワークシート、指導の仕方、声のかけ方を変化させていることがよくわかりました。担当した三学年の生徒は、日が経つごとに主体的に授業に参加してくれる姿が多く見られるようになりました。生徒がよく授業を聞く姿、生徒からの自発的な挙手や質問等、その全てが嬉しかったです。

学級指導については、教科指導と同じ指導教諭の先生についていただき、その先生が受け持つ三学年の学級に入りました。第一週目から生活記録の点検を行い、第二週目以降は朝の会や帰りの会、給食指導なども行いました。学級指導では、生徒と様々な手段で積極的に関わることの大切さを学びました。休み時間や下校指導時において生徒と話すことはもちろん、生活記録でコミュニケーションをとること、朝の職員会議前に黒板に挨拶を書くこと等、一つひとつの生徒との関わりがよりよい信頼関係の構築に繋がると感じました。特に、何気なく書いていた朝の挨拶について、ある先生から「黒板の挨拶を消そうとすると悲しそうな反応をするから、なかなか消せなかった。」と聞いた時には、胸がいっぱいになりました。実習の最終日には、生徒から色紙をプレゼントしていただきました。色紙は、机の上に飾っています。一生ものの宝物です。

三週間の教育実習を終えて、教職への憧れと夢を叶えたい気持ちがより一層強くなりました。私のことをあたたかく迎え入れてくださった母校の生徒の皆さんと熱心にご指導してくださった先生方に感謝の気持ちでいっぱいです。教育実習を通して学んだことを将来に活かせるよう、今後も励んでいきたいと思います。

(文学部英語英文学科 令和4年度教育実習)

教育実習で見たもの

(東京都 市立中学校 理科)

教育実習の3週間は、生徒と実際に関わるができるからこそその楽しさと不安が常に入り乱れるような日々でし

た。

教科指導では、1回の授業で教える量、クラスを巻き込んで授業をどう盛り上げるかが特に難しいと感じました。何度も模擬授業を大学でやってきたとはいえ実際に30人の生徒を目の前にすると、身が引き締まる思いでした。自分では分かっている内容を、初めて学ぶ人に分かりやすく伝えるにはどうしたら良いのか。1回の授業で扱う量のさじ加減は大事なことはもちろん、その時間内での緩急の付け方はクラスの盛り上がりにもつながります。あるクラスでうまくいったからと言って、全クラスでうまくいくとは限りません。クラスの雰囲気に合わせた微調整は難しいですが、がっちりとはまったときの達成感は大きかったです。

また、毎時間一言でもその授業について振り返りをさせることは、生徒の理解度が見えてくるだけでなく、自分自身の授業の進め方を考えるきっかけになりました。

生徒指導では単純に注意をするだけでは終わらず、その先、生徒が自分から考えて行動できるようにするために何をすべきか、ということを意識していました。状況に合わせた声のかけ方や、毎回同じにならないようにするにはどうしたら良いかなど、瞬発力と思考力が同時に試される瞬間でもありました。3週間という短い期間の間でも、自分の声のかけ方次第でクラス、学年の雰囲気がだんだんと変わっていくのを実感したときは自分が発するひとことの重さはもちろん、教員の面白さを垣間見られたように感じました。

研究授業の終了後、それまでの授業とはまた違った緊張から解放された安堵感で涙がこぼれた時、教科指導の先生にかけて頂いた「それはこの期間、生徒に全力で向き合ってきた証拠」という言葉は、不安に思うことが多かった私にとって自信につながるものでした。教育実習は毎日が刺激的で、現場に行くからこそ見えるものに全力で取り組んだ日々は、一生忘れられない経験になりました。

(社会情報学部社会情報学科環境情報学専攻 令和4年度教育実習)

「教育実習の流れ」

(埼玉県 市立小学校)

教育実習では、まず1番に体力が重要となります。実習中は、7時頃に家を出て、帰りは早くても、5時くらいとなります。それまで動き続けます。座る時は給食を食べる時だけの時も、多々ありました。

1日の流れは、【朝の準備→朝の会→1時間目から4時間目→給食→掃除・お昼休み→5、6時間目→帰りの会】という流れでした。

「朝の会」

基本的に、朝の会の前の宿題チェックから入りました。何日か経ち慣れてきたところで、朝の会を任せてもらえるようになりました。朝の会は基本的に「短く・わかりやすく」を意識しました。朝の時間は忙しく、1時間目の授業が迫っているので少しでも早く終わらせることができるように心掛けていました。

「授業」

授業では、はじめは机間観察を行います。その中で困っている児童や、つまづいてしまっている児童にアドバイスなどを行います。教室の後ろに立ち、どのように授業が行われているのかを常にメモしていました。この時に板書も大まかに書いておくと、参考にできるのでおすすめです。

実際に授業をさせて頂く時には、なるべく担当クラスの流れを大切にしていました。その先生、そのクラスのやり方があるので授業の流れを日々注目します。また、流れを担当教員に確認するなど事前準備を必ず行うことが大切です。自分が前に立ち授業を行った際に、児童が理解出来ていないようだったら無理に進まず、少し戻ってみたり、少しヒントを出したりとゆっくり行う時間も意識しました。

「休み時間」

思っているほど、児童と過ごすことは出来ませんでした。実習のはじめの方は過ごせることもありましたが、授業をさせて頂く時はその授業準備に時間を使ってしまうことが多く、遊べる回数が減ってしまいました。しかし、隙間時間を見つけ、児童とのコミュニケーションを取ることを意識することは毎日心掛けました。休み時間は、本気で遊んで問題ありませんでした。児童も本気で来てくれるからです。一緒に楽しい時間を過ごすことが出来ました。

「給食・掃除」

児童と一緒にすることができる時間なので、積極的に動くことを意識しました。この時間はみんなと一緒に全力で用意や片付け、掃除を頑張ります。

「帰りの会」

全員をしっかりと見送ることが大切だと改めて気がつくことが出来る時間でした。

帰りの会の後は、教室の整理整頓、明日の予定の確認、授業準備など学校によって流れは違いますが忙しいという印象があります。

このような流れになっています。

学校の先生にたくさんのことを学ぶことはもちろんですが、児童から学ぶこともたくさんあります。先生方に頼り、たくさん聞くことは本当に大切です。わからないことはそのままにせず、すぐに聞くことが大切です。時には児童からアドバイスをもらおうということもしました。

4週間とはじめは長く感じるかもしれませんが、慣れてくると本当にあっという間です。頑張ってください。応援しています。

(家政学部児童学科児童教育専攻 令和4年度教育実習)

3〔介護等体験〕

「介護等体験を通して学んだこと」

私は、介護等体験で3年生の時に特別支援学校に行きました。事前に大学の講義で知識として学んだことはありましたが、実際に特別支援学校に入ることも、生徒たちと触れ合うことも初めてでした。また実習というものも人生で初めての経験だったので、前日は緊張と不安であまり眠れなかったことを覚えています。

迎えた当日、緊張で足も声も震えていましたが、担任の先生や生徒たちが温かく迎えてくれたおかげで少し和らぎました。その後、担任の先生からクラスの生徒にどのような障がいがあって、どのように接すれば良いのかを教えてください一日が始まりました。

初日から、いろいろなクラスの授業を見学させていただいたので、他のクラスの生徒たちともたくさん交流することができました。みんなとても明るく、人懐っこいので私をみると笑顔で「先生！よろしくお願いします！」と声をかけてくれました。

先生方からアドバイスはいただいていましたが、突発的に走って廊下に行ってしまう生徒や授業中、飽きてしまって落ち着かなくなる生徒に対してどのように対応すればよいのか分からず、咄嗟に子ども一人一人を対応する難しさを感じました。

2日目は、担当クラスの生徒たちとビンゴゲームを一緒にやりました。最初はみんな夢中でやっていましたが、途中から飽きてしまったり、落ち着かなくなってしまう生徒も出てきました。昨日までの自分だったら、ただ焦って立ち尽くすことしかできませんでしたが、自分からその生徒の近くに行って声をかけることができました。自分なりに工夫しながら生徒と関わることができたと思います。

2日間という短い期間でしたが、生徒たちはそれぞれ一生懸命目の前の物事と向き合い、先生方はそれをサポートするという姿を間近で目にするのができ、多くのことを学びました。特に先生が全てやってあげるのではなく、生徒が自分でできるようになるために支援するという部分は、特別支援学校に限らず通常学級でも通ずるものがあるなと今回の体験から考えることができました。

(文学部日本文学科 令和5年度〈特別支援学校〉)

私は二年生のときにデイサービスセンターに5日間、三年生のときに特別支援学校に2日間、介護等体験に参加した。デイサービスセンターではお年寄りの方々が日帰りで1日お話しをしたり、入浴、体操などをして過ごしている。私は、そうして毎日いらっしゃる方々の話し相手をしたり、昼食の準備をしたり入浴後の髪をドライヤーで乾かしたり、一緒にゲームに参加したりした。また納涼祭の季節だったので盆踊りや、お祭りで配るしおりや飾りの作成などを一緒に手伝った。

特別支援学校では小学部と中学部が一緒の学校の小学部1年生のクラスに入った。特別支援学校は、通常の学校にはない自立の時間などがあり、着替えや一日のスケジュールを理解するなど、生活の仕方を学ぶ時間が多かった。また文化発表会の時期だったので練習とリハーサルにも参加した。児童によってさまざまな個性（障害）があり、走り回ってしまう子や一つのことをやりだすとなかなかやめられない子などいたが、教員の方々は一人ひとりに合わせた接し方をしていた。二日間という短い期間では授業内容を把握したり、技術的な部分を学ぶことはなかなかできなかったが、児童との交流はよく取れたと思う。

介護体験にあって思ったことは、デイサービスセンターでも特別支援学校でも、安全の確認を第一に行う中で一人ひとりに合わせた対応をしているということだ。またそのためには日常のコミュニケーションからその人がどんな支援が必要なのかと云うことを見極めることを重視していると感じた。そしてそれは専門の知識がなくてもできること

だ。確かに排泄・入浴や昼食介護などは、専門の知識や資格が必要であるので私には何も出来ることがなかった。しかしコミュニケーションをとったり、危険かどうか注意して見ることはできるので、自分からもとにかくたくさん関わりを持つことを心がけた。

〔文学部日本文学科 平成22年度介護等体験〈社会福祉施設〉〕
〔平成23年度介護等体験〈特別支援学校〉〕

「介護等体験を通して学んだこと」

私は介護等体験として、2年生の時に福祉センターの中にある障がいのある方が仕事訓練をする施設に5日間行きました。3年生の時には、特別支援学校に2日間行きました。

①福祉センター

私は、就労継続支援B型の方が仕事する場所に配属になりました。就労継続支援B型という言葉をはじめて知りました。介護等体験の前に何も知らないままで体験を行うことは、失礼と考え、障がいについてのことや就労継続支援B型について様々なことを調べていきました。5日間の体験内容は、施設利用者の方と、福祉センターが請け負っている割り箸の袋詰めをしたり、センターが経営しているパン屋さんの掃除をすることでした。また、お昼休みには昼食を一緒に食べました。話をするときは、話をする、仕事をするときは仕事をするという、施設利用者の方にメリハリをつけるのが難しかったです。この活動を通して、プラスの声かけというのを考えながら関わるのが大切であると学びました。

②特別支援学校

現場でしか、体験することができないことをたくさん経験することができました。普段の生活の中で障がいがある方と接する機会は、ほとんどありません。前日は大変緊張しましたが、当日は充実した日になりました。

特別支援学校とは、名前は知っていましたが、どのような学校なのかよくわかりませんでした。私は、体験前に必ず特別支援学校とはどういう学校なのか、どのような障がいがあるのかというのは、きちんと調べておいたほうが良いと思います。そして、当日、担任の先生にクラスの生徒がどのような障がいがあり、どのような接し方をすればいいのかアドバイスを聞き、先生と介護等体験生との、情報交換を綿密にすることをおすすめします。生徒は、介護等体験生であっても、先生という認識をしています。先生が、不安がっていると、生徒も不安がってしまいます。私が経験したことかというと、1日のスケジュールがしっかりしていないと活動ができない生徒がいました。私が、1日のスケジュールを把握していなかったため、生徒が「次、何をしますか？」という質問に私がすぐ答えることができなかった、不安にさせてしまったことがありました。あの時私ができたことは、おどおどするのではなく、黒板に1日のスケジュールが貼ってあるので、一緒に見に行こう！という声かけができればよかったと思いました。一つの言葉であっても、視点を変えて、プラスの言い方に変えていく力が大切であると思いました。

最後になりますが、必ず目標を立てて、介護等体験に挑むことが必要です。私は、①「発語がない方でも、諦めずにコミュニケーションを取る。」②「施設利用者の方や生徒が1人でできることは、最後まで手を出さずにやり抜くまで見守る。」③「どんな時でも笑顔で明るく！はきはきと！」というこの3つを目標に掲げて、2つの介護等体験を行いました。いろいろなことを頑張ろうとすると、自分が大変になります。五感を働かせて、たくさんのことを吸収してください。現場の辛さ、楽しさなど、様々なことを経験することができます。

〔文学部英文学科 平成27年度介護等体験〈社会福祉施設〉〕
〔平成28年度介護等体験〈特別支援学校〉〕

4 〔教員採用試験〕

「教員採用試験を終えて」

(新潟県・中高・家庭)

こうして体験記を書けることをとても嬉しく思います。私は新潟県の教員採用試験を受験し、合格することができました。これから採用試験を受験するみなさんへ、受験しようか迷っている方へ、何か伝えることができれば幸いです。

私は大学入学当初に“新潟県の教員になる”という目標を掲げました。この目標達成に向けて努力する中で、私に教員なんてできるのだろうか、生徒に家庭科を教える事ができるのだろうか、自分に自信がなくなり教員になることにどこか迷いが生じ、不安になることもありました。しかし、教員になって大好きな家庭科を教えたい、子どもと関わる仕事に就きたいという思いは、4年間失せることはありませんでした。教員採用試験合格までの道のりは、短いようでとても長かったです。

私は校外実習を終えた3年生の2月から本格的に採用試験の勉強を始めました。初めて解いた過去問は3割しか解けず、とても落ち込みました。とにかく毎日毎日勉強を重ね、基礎を身に付けていきました。時には諦めかけたり、くじけそうになる時もありました。そんな時、私の心の支えになったのは同じ目標に向かって頑張る教職組のみんなでした。一緒に大学に通って勉強することや、お互いに問題を出し合ったりし、みんなで高め合っていました。教職総合支援センターの先生方にもたくさんお世話になり、小論文の添削や実技試験対策、面接の対策等を行って頂きました。仲間や先生方、応援してくださる方々がいて、私は一人じゃないと思えたことがとても心強かったです。

教育実習では実際に生徒と関わり、授業づくりの工夫や学級経営について学びました。教育実習最終日に生徒が、“先生の授業で初めて家庭科が楽しいと思えた”と言ってくれたことは、とても嬉しく絶対に教員になると決意した瞬間でもありました。

最後まで頑張れたことは、新潟県の教員になりたいという強い思いと、同じ目標に向かって頑張る仲間がいたからだと思います。全ての方々に感謝の気持ちを伝えたいです。これからは残り少ない大学生活を充実させるとともに、教員としての準備を進めていきたいです。

これから採用試験を受験する方や、受験しようか迷っている方、自信を無くしたり不安に思うこともあると思いますが、たくさん悩んで自分の将来を決めてほしいと思います。いつか同じ教員として一緒に働けることを楽しみにしています。頑張ってください！！

(家政学部食物学科食物学専攻 令和6年3月卒業)

「未来の同僚の皆さんへ」

(新潟県・小学校全科)

「3月28日」忘れもしない、わたしが教員採用試験対策の勉強を始めた日である。春休み明けのガイダンスの日、「もう4年生か…」などと安易に考えていた私の目に飛び込んできたのは、参考書や問題集を眺めるクラスメート達の姿だった。そこから、私の教員採用試験対策が始まった。後輩の皆さんには、私のような失敗をしてほしくないの、僭越ながら、以下に2点のアドバイスをしたい。

1点目は、勉強をする覚悟をすることである。「教員採用試験は時の運」とよく言われるが、最低限の学力がなければ運を味方につけることさえできない。私はまず、自分が集中して勉強できる場所（私の場合は大学）を見つけ、そこにこもって1冊の問題集（セサミノート）をひたすら繰り返した。ただ、私の失敗は最後まで受験する県を決められなかったために、オールマイティに勉強するしかなかったことである。もっと早く受験する県を決めていたなら、

それだけ早くその県の傾向に合わせて勉強することができたと思う。実際に勉強して実感したことだが、その県によって絶対に出題される問題や全く出題されない問題などがはっきりしている。すべてを頭に入れる必要はなくピンポイントに勉強すれば、解くのは問題集の3分の1程度でよい。

2点目は、小論文や面接の指導をしてもらえる人を見つけることである。一人でコツコツ問題を解けばよい勉強とは違い、小論文や面接は適切な指導者がいなければ対策を立てることができない。私は、大学の先生や理科支援員としてお世話になっていた小学校の校長先生などに指導していただいた。指導していただいているうちに、小論文や面接に関しては得手不得手よりも練習量だと痛感した。論文の形式をつかむまでは書くよりほかにない。面接で語れるだけの教育経験を積むには、様々なボランティアをするなどして経験するしかない。大学生活で自分が語れる引き出しをたくさん作り、それをうまく引き出してくれる指導者に協力してもらうことが大切である。

このように考えると、自分が非常に大層なことを成し遂げたかのようなのだが、担任として子どもたちを預かる立場となった今振り返ると、試験対策だけで努力していると感じていた自分が恥ずかしい。それだけ、クラス担任は忙しく辛いことも多い。しかし、その辛さを遥かに凌ぐほどの喜びがあるからこそ、「学校の先生」はやめられない。

(家政学部児童学科児童教育専攻 平成22年3月卒業)

教員採用試験を終えて

教員採用試験は団体戦

(千葉県・小学校全科)

教員採用試験を終えた今、毎日の勉強や試験対策から開放された嬉しさや先生になれる嬉しさもありますが、毎日のように大学で共に勉強していた仲間達に会えない寂しさの方が大きいです。2月から約半年間、互いに励まし合い、助け合いながら将来先生になった時のことを考え、試験対策に取り組んでできました。教員採用試験は個人戦と言われますが、私はそうとは思いません。今回は私が仲間達と行っていた試験対策についてお伝えしたいと思います。

私や仲間達が1人で勉強を続けられる性格ではなかったことや、同じ県の教員採用試験を受ける子が多かったこともあり自然と集まって勉強をするようになりました。9時から大学に集まり夕方まで勉強に励んでいました。参考書や過去問を繰り返し解き、分からない問題は互いに教え合い乗り越えていました。互いに先輩や先生方に聞いた情報を交換し、共有していました。教員養成セミナーの問題を解いたり、問題をカードにし通学中に繰り返し行えるようにしました。1次試験の集団討論の練習は、教職支援センターの先生方に指導頂きながら、週に2、3回ほど行っていました。終わった後は、みんなで反省会を行い施策や教育問題について調べたりしていました。当日は初対面の方と同じ組になるため、他学部や他大学の学生と練習をしていました。

2次試験対策では、個人面接の練習で聞かれた質問を共有したり、困った質問をみんなで考えたりしました。模擬授業の練習は、それぞれ実習で行った物を共有しながら、五教科の授業を考えました。授業を見合いながら、協議を繰り返し改善していきました。仲間の授業を見て、良い点を真似し、より良い授業になるように練習していました。

私が頑張り続けられたのは一緒に教員を目指し、努力し続けてくれた仲間達のおかげです。教員採用試験までの約半年間は大学生活の中でとっても濃い良い思い出です。半年前の1人で頑張らなきゃと思っていた私や、現在教員採用試験を控えている方に、教員採用試験は、個人戦ではなく団体戦であり、一緒に努力してくれる仲間がいることを伝えたいです。不安になった時は、教壇に立ち子供たちと笑っている自分の姿、先生を目指したきっかけを想像し、思い出してください。皆さんは1人じゃありません。皆さんの夢が叶うことを応援しています。

(家政学部児童学科児童教育専攻 令和7年3月卒業)

教員採用試験を終えて

(群馬県・中学・理科)

私は、群馬県教員採用試験を受けました。そして合格することができました。学生の私にとって、採用試験に合格することが試験勉強を行う上での目標でした。しかし、合格した今の私は目標を達成することが出来たと同時にここからがスタートであると感じています。

私は高校生の時から教師になりたいと考えていましたが、いざ就職にむけて進路を決め始める頃は、自分が本当に教師になれるのかと不安を感じ、決心するまで心のどこかで迷っている部分がありました。しかし、理科実践演習の講義などを通して理科の教材を作る楽しさや、普段の生活の中でも授業に使えるような写真は撮れないか、話題はいかなど探すようになり、先生になって沢山の生徒に理科の楽しさを教えたいと強く感じるようになりました。

教育実習では実際に生徒と関わり合い、生徒との接し方や授業を行う上での工夫などを学びました。生徒と関わっている時間はとても楽しく毎日が充実していました。3週間を終えたときには絶対教員になると思いが強まりました。

試験勉強はとても長い期間でしたが、最後まで気持ちを切らさずやってこれたのは、教師になりたいという強い気持ちと、それに加えて私が一人ではなかったからです。多摩キャンパスの理科教職のメンバー、千代田キャンパスの同じ教員を目指す仲間がいたから私は最後まで勉強を続けることができました。受験は団体戦だとよく言いますが、この意味を初めて理解することができた気がしました。先生方には様々なことを指導していただきとても感謝しています。

私の今の目標は、残りの学生生活を充実させるとともに4月から教壇に立つ立場としてしっかりと勉強して、準備をしておくということです。今からが私のスタートです。

(社会情報学部社会情報学科環境情報学専攻 平成29年3月卒業)

「言葉が持つ力」

(埼玉県・中高・国語)

私は高校を卒業するとき、恩師と「ある約束」を交わしました。その約束を果たせるのは4年後。約束を果たすには、大学4年間で教職課程を制覇すること、さらには教員採用試験に合格しなければいけませんでした。それは、私にとって人生一の挑戦でした。

318時間。

この時間は、私が1次試験にかけた時間です。1日10時間机に向かう日もありました。たくさん勉強したんだぞと自慢したいわけではありません。なぜこんなに頑張ることができたのか、それを、読んでくださっている皆さんにお伝えしたいと思います。

1次では、専門教養、一般・教職教養の3分野が試験内容でした。勉強を始めたのは大学3年生の夏。初めて解いた過去問は4割にも届いていませんでした。「このままじゃダメだ」そう思った私は、出題傾向を把握し、授業やバイトの合間を縫って勉強を始めました。そのうち、不安と焦りから勉強をしていないと落ち着かなくなりました。常に参考書を持ち歩き、遊ぶ時間や寝る時間を削って、勉強をしました。それでも点数は上がりませんでした。試験日が近づいてきた頃、私の頭はネガティブな感情でいっぱいになっていました。「1次で落ちるかも。」周りにもそのネガティブな感情を振り撒いていました。そんなとき、「絶対受かるよ。」隣で一緒に勉強をしてくれていた友達がそんな言葉をかけてくれました。私が不安な気持ちを口にするたびに、明るい言葉で返してくれたのです。いつのまにか「絶対合格する。」そんな強い気持ちを持てるようになっていました。

自信をつけて挑んだ1次試験。自己最高得点を取り、合格しました。

つづく2次試験は、面接、集団討論、小論文が試験内容でした。ほぼ毎日面接練習をし、空いた時間があれば、面

接ノートを見返していました。しかし、ここでも私の不安症は発動しました。「絶対受かる」「大丈夫」「あなたなら
できる」これらの言葉は一緒に戦う仲間やセンターの先生方から頂いた言葉です。毎日投げかけてくださるその言葉
はおまじないのようで、私の心にじわじわと入り込んでいきました。そのおかげで、2次試験も力を出し切り、合格
することができました。

なぜこんなに頑張ることができたのか。

それは、多くの方から言葉の力を頂いたからだと思っています。

「言霊」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。言葉には力が宿ります。試験を受けるにあたって、頂いた言
葉たち。「いつか「先生になりました」って絶対報告をしにいきます！」あの日恩師と交わした約束。全て言霊となっ
て返ってきたのだと、私は信じています。不安でいっぱいになった時、「自分ならできる」と声に出してみてください
い。必ず力となって自分に返ってきます。

私は、これから出会う子どもたちにも、そして自分自身にも明るい言葉をかけ続けていきたいです。過信はせず、
自分のことを信じること。それがこれからの目標です。

(文学部日本文学科 令和7年3月卒業)